


中区栄一丁目

# 豎三蔵通遺跡


第2次調査の概要

名古屋市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は、名古屋市中区栄一丁目28番地に所在する、竪三蔵通遺跡第2次発掘調査の概要報告書である。
- 2 発掘調査は、昭和58年7月22日から同年9月22日まで行った。
- 3 調査は、名古屋市教育委員会が実施し、名古屋市見晴台考古資料館学芸員（平出紀男、木村有作、野口泰子）が担当した。
-  調査に際して、中野良法、伊藤正人、千田嘉博氏のご協力をいただいた。記して謝意を表します。
- 5 本遺跡出土の遺物、実測図等は、見晴台考古資料館が保管している。
- 6 本書は、調査担当者及び水野裕之氏の協力を得て、野口がまとめた。

### 参考文献

- |  |           |
|--|-----------|
| 企画展「城下町のやきもの一清洲・名古屋の出土品」   | 愛知県陶磁資料館  |
| 竪三蔵通遺跡発掘調査概要報告書（岡山病院地内）  | 名古屋市教育委員会 |
| 第Ⅲ次竪三蔵通遺跡発掘調査概要報告書   | 名古屋市教育委員会 |
| 第4次竪三蔵通遺跡発掘調査概要報告書   | 名古屋市教育委員会 |
| 第5次竪三蔵通遺跡発掘調査概要報告書   | 名古屋市教育委員会 |
|  第6次竪三蔵通遺跡発掘調査概要報告書 | 名古屋市教育委員会 |
| 竪三蔵通遺跡第7次調査の概要   | 名古屋市教育委員会 |
| 竪三蔵通遺跡第8・9次調査の概要   | 名古屋市教育委員会 |
| 伊勢山中学校遺跡一第4次調査の概報一   | 名古屋市教育委員会 |

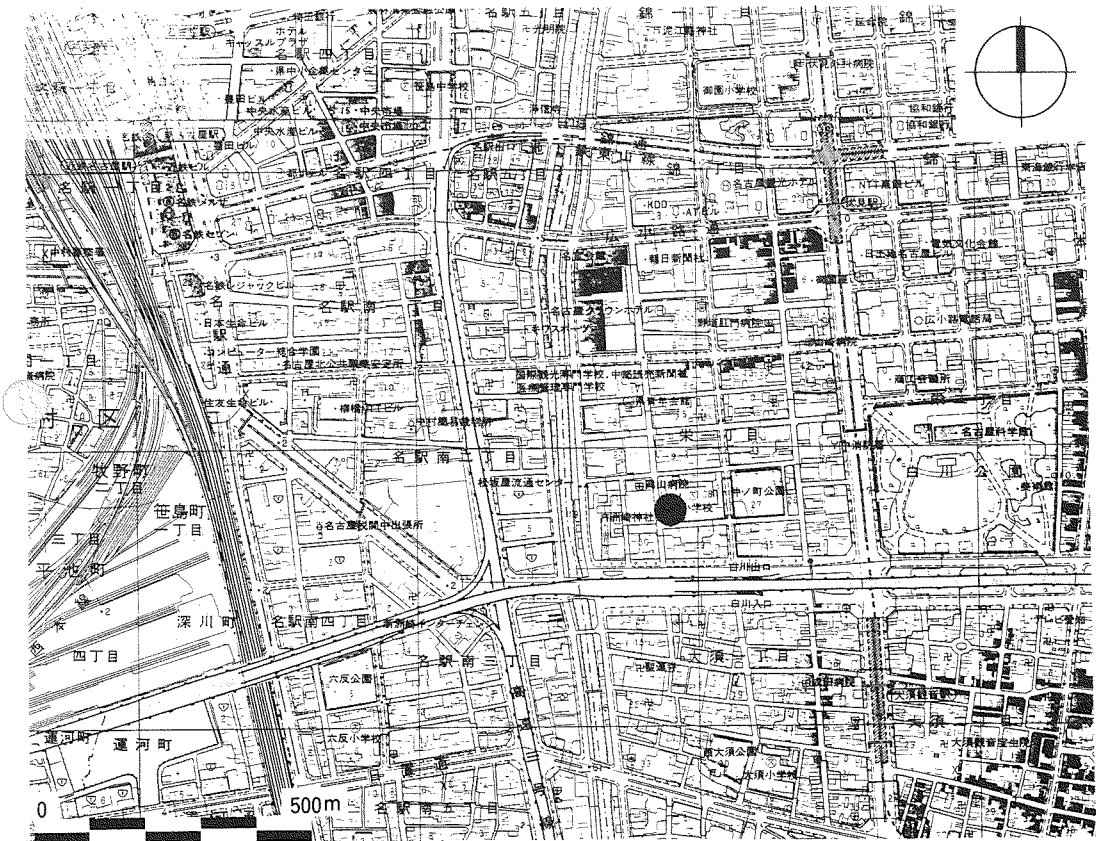
## 目 次

1	位置と環境	1		
2	調査の経過	5		
3	遺構と遺物	6		
4	まとめ	14		
第1図	調査位置図	1	写真1 作業風景	5
第2図	尾府名古屋図	2	写真2 石匙（頁岩）	6
第3図	尾府全図	2	写真3 S K 01高杯出土状況	6
第4図	調査区位置図	3	写真4 緑釉段皿	6
第5図	竪三蔵通遺跡と周辺遺跡	4	写真5 S D 01・02	6
第6図	土師器・須恵器・灰釉陶器	7	写真6 常滑大甕	9
第7図	S D 03断面図（西面）	9	写真7 鉄釉茶壺	9
第8図	S D 04断面図（南面）	10	写真8 S D 03	9
第9図	S K 05・06等断面図（東面）	12	写真9 P - 4	10
第10図	近世陶器	13	写真10 S D 04	10
第11図	遺構図	15	写真11 S K 12	11
			写真12 S K 05	11
			写真13 S K 05遺物出土状況（上層）	12
			写真14 S K 05遺物出土状況（中層）	12
			写真15 礎石	14

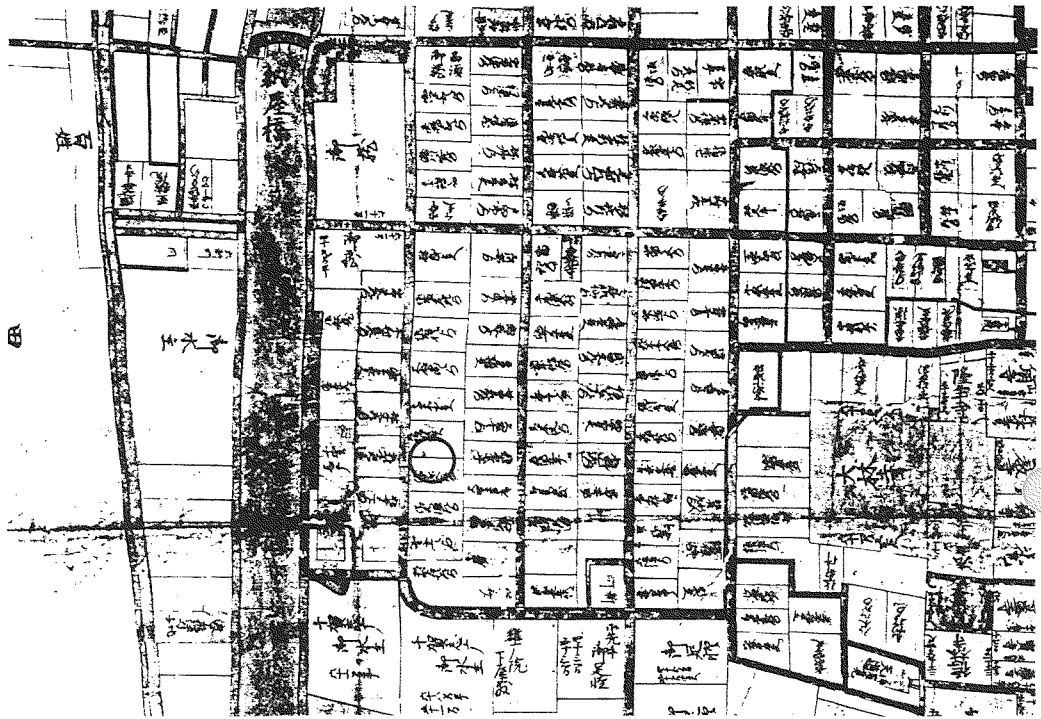
# 1 位置と環境

名古屋市街の中央部には、今からおよそ6万年前の新生代第四紀更新世に形成された台地が広がり、北西から那古野台地、熱田台地、御器所台地、瑞穂台地、笠寺台地に分けられる。豎三蔵通遺跡は市の中央部、那古野台地西縁付近、標高5～10mあたりに立地し、西側には沖積平野が広がり、その間に堀川が開削されている。J R名古屋駅より南東へ約1.2km方にあり、江戸時代の城下町を継承して発展してきたため早くから都市化の進んだ地域である。

遺跡の発見は昭和45年頃と比較的新しく、昭和56年の分布調査の際、台地南端部が弥生代～中世の遺物散布地として周知されるようになった。ところが、昭和58年に行われた第1次調査・第2次調査（本調査）により、古墳時代から中世にいたる住居跡等遺構、近世の屋敷跡や濠等を検出し、名古屋城下町を復元する上でも重要な遺跡であることが明らかとなった。また、遺跡の範囲も、東西約450m、南北約240m、面積約10万8千㎡と推



第1図 調査位置図（国土地理院 1：10,000地形図 昭和63年より）



第2図 尾府名古屋図(宝永6年)  
(蓬左文庫所蔵複製より)

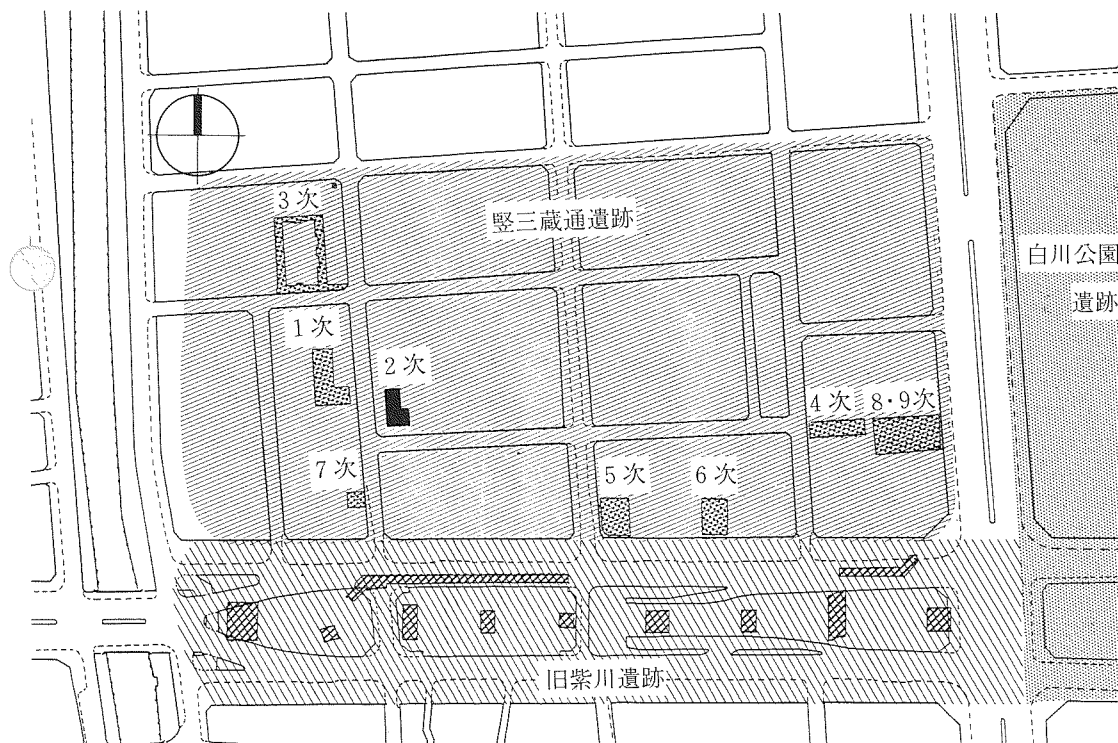


第3図 尾府全圖  
(名古屋市史地理編より)

定され、市内屈指の広さを有する遺跡となったのである。その後、都市再開発に伴い、昭和60年～63年までに7度の調査が行われた。いずれも遺跡の縁辺付近での調査であったが、第3次調査では古墳～奈良時代の住居跡、第4次調査では古墳の周溝の可能性のある溝が検出され、第5次調査では旧石器時代のナイフ形石器を始め、縄文時代、弥生時代後期の遺物がまとめて出土し、第6次調査では中世の土坑・溝・井戸等が検出されるなど、旧石器時代～近・現代にいたる多くの遺構・遺物が検出され、市内で最も早く始まり、江戸時代の城下町まで連綿と続いた複合遺跡である。

遺跡名の豎三蔵通（たてみつくらどおり）は、第1次調査区と第2次調査区の間を通る南北通名であるが、江戸時代には三ッ蔵筋または豎三蔵と呼ばれ、納屋橋から南側の堀川岸に、藩の御蔵があったことに由来している。この御蔵は、福島正則が清洲城内に長さ三十間の米蔵を三棟建てたことに始まり、いわゆる清洲越えて名古屋に城下町を移した際、この地に十数棟の蔵を建てたが、「三ッ蔵」の名で呼ばれた。明治時代になり御蔵は取り壊され、近年には三蔵の町名も消え、現在は豎三蔵通と東西道路（遺跡の北方）の三蔵通に名を残している。

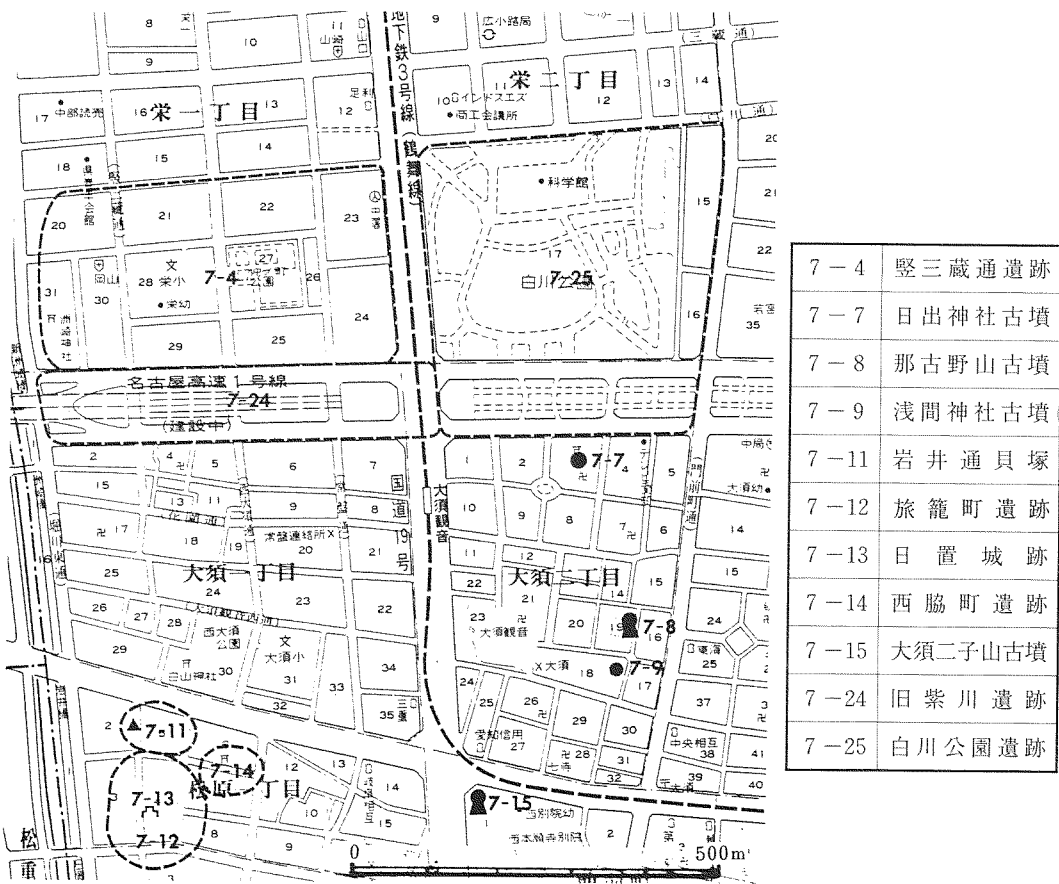
「尾府名古屋図(宝永6年)」(第2図)や「天明年間名古屋市中支配分図」を見ると、遺跡の範囲は、中・下級藩士が居住していた武家屋敷地域にあたる。屋敷は、南北通りに面



第4図 調査区位置図

して東西に正面を開き、背中合わせに地割りされている。居住者には異動があるようで、一定していないが、今回の調査地点は、明治2年「尾府全図」（第3図）によれば、津田邸と鈴木邸のあたりになる。

本遺跡の南側は、東から西に抜ける谷筋となっており、戦前までは小河川（紫川）が流れていた。この紫川は江戸時代に構築された人工の川で、このあたりでは科学館の北付近より国道19号線を南流し、若宮大通で西流している。（本遺跡第8・9次調査では、幕末以降に西側に改修された紫川が検出された。）5次にわたる旧紫川遺跡の調査では、護岸石垣等が検出され、また、縄文時代以降の遺物が出土している。東側の谷（国道19号線）を隔てた白川公園遺跡は、江戸時代は寺町であり、第1次調査の際、260基を数える土葬墓が検出されている。この遺跡の南側には、日出神社古墳、那古野山古墳、浅間神社古大須二子山古墳（滅）と、古墳が点在している。那古野山古墳、大須二子山古墳の築造時期は5世紀後半～6世紀と推定されており、本遺跡には同時期頃の住居跡があることから関連も注目される。



第5図 豎三蔵通遺跡と周辺遺跡

## 2 調査の経過

第2次調査は、市立栄小学校内にある市立栄幼稚園の園舎建設に伴うもので、対象面積は約380㎡であった。現況は、ブランコ、すべり台等遊具が設置された園庭であり、北東部には小学校の仮給食棟が建っていた。

調査は、昭和58年7月22日、遊具の撤去から始まった。27日、バックホウによる表土掘削（厚さ約25cm）を行う。排水管等による攪乱が比較的多く、まず、攪乱範囲の確認・掘削から行った。8月5日から包含層掘削を開始、包含層は茶褐色砂シルトで、南側では40～50cm程度堆積しているが、北へ行く程薄くなり、残っていないところもある。茶褐色砂シルトからは、須恵器・土師器～近世陶器が出土している。調査区中央部南付近では黒褐色砂シルトの包含層が部分的にあり、古墳～奈良・平安時代の須恵器等が出土している。また、この付近では、黒褐色砂シルトを埋土とする遺構が多く検出された。11日より、包含層の残っていないところや薄いところから遺構検出をし、18日、北側から遺構掘削にはいる。南端では茶褐色砂シルトを掘削中、東側で地山面が検出され、東西に走る溝の存在が判明した。茶褐色砂シルトを埋土とする遺構は大型のものが目立ち、近世陶器を出土するものが多い。9月1日に掘削を終了。2日、写真撮影及び南端の溝を平板で実測する。5日より割り付け、9日より実測を開始、21日にエレベーション終了。22日に一部埋め戻しを行い、全作業を終了した。



写真1 作業風景



### 3 遺構と遺物

検出された遺構は、古代～近世・近代にわたる土坑、溝、ピット、井戸等であり、遺物は、縄文時代中ごろの石匙（写真2）、若干量の弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、中世・近世～近代陶器等、コンテナ約120箱分が出土した。遺構・遺物とも近世に属するものが多い。

#### ○古代

黒褐色砂シルトを埋土とする遺構が、ほぼこの時期に該当すると思われる。大部分が径40cm以下のピットであるが、土坑（S K 01～05等）、溝（S D 01・02）もある。

S K 01は、調査区南側中央部に位置し、南半分は攪乱によって削られているが、残存径約70cm、残存底面径約8cm、深さ約55cm、円錐形を呈している。埋土上位に4～5世紀代の高杯（写真3・第6図2）が倒置した状態であり、その下からほぼ完形の小型壺（第6図1）が出土している。S K 01の東側にある焼土1に伴う焼土塊を含む層が、S K 01の埋



写真2 石匙（頁岩）



写真3 S K 01高杯出土状況

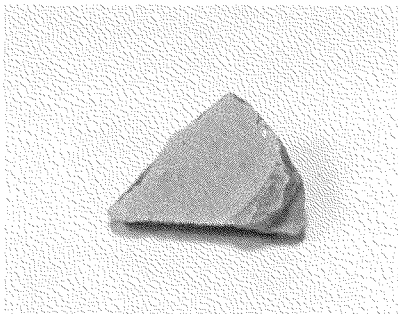


写真4 緑釉段皿

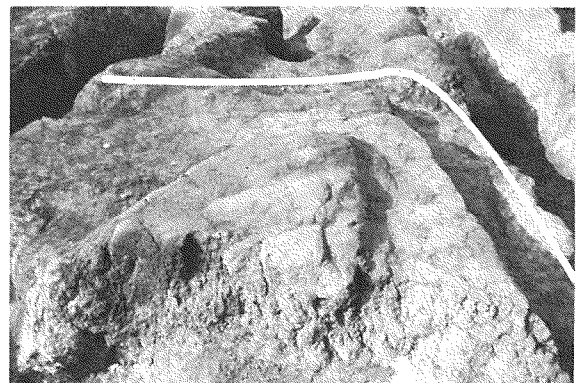
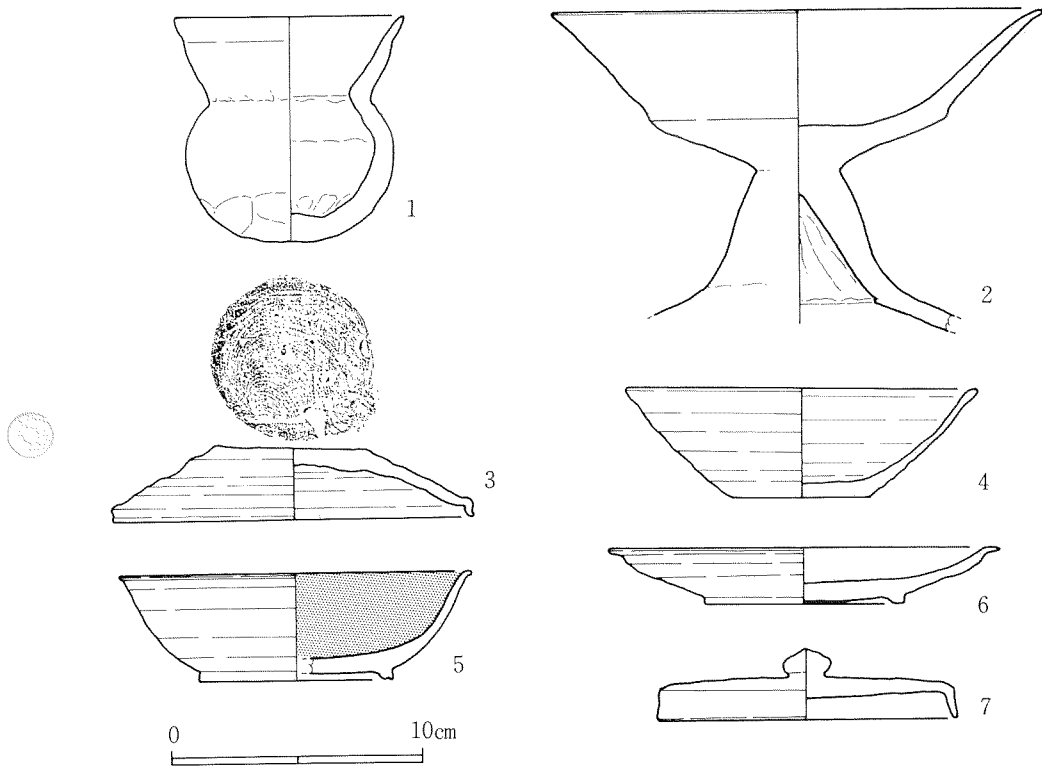


写真5 S D 01・02



第6図 土師器・須恵器・灰釉陶器

土上を覆っていた。

⑤ S D 01・02は、ともに幅25~30cm、深さ5~10cmを測り、北東部で直交している。交点あたりに別の遺構があるためわかりにくいですが、竪穴住居の東辺から北辺（残存長約4.4m）にあたる周溝（写真5）と推測される。S D 02の埋土から須恵器杯蓋（第6図3）が出土している。また、S D 01北側にある浅く不定形な土坑、S K 03からは須恵器杯（第6図4）が出土し、付近にあるS K 02・04・05からも同時期の須恵器片が出土している。第6図5~7は包含層及び攪乱出土の灰釉碗・皿・蓋であり、碗の内側全体に灰釉が施釉されている。須恵器・灰釉陶器とも9世紀代（K-14号窯の時期）と考えられる。その他、古墳時代の須恵器が少量出土している。また、遺構としては中世に属すると思われるが、S D 03の埋土中層から緑釉段皿片（写真4）が出土している。

黒褐色砂シルト中及び黒褐色砂シルト下の地山面上で焼土が3ヶ所、集中して検出されている。焼土2・3からは、古墳時代の須恵器片が出土している。

## ○中世

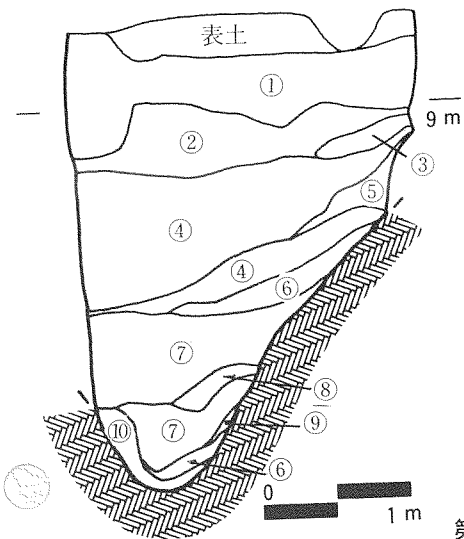
S D 03は、調査区南端に位置し、東西方向（やや北西～南東に傾く）に走る溝である。溝の北側に現在使用している排水管が通っていること、調査区の南端であることから、底部は完掘したが、両壁は一部を除いて未掘である。溝の深さは2 m 50cm以上を測り、東側で確認した北壁等から推測すると、形状はV字形を呈し、幅は3.5 m～4 m位になると思われる。底面中央部には、長さ約5 m、幅1 m～1.2 m、深さ約20cmの溝状の遺構がある。S D 03の埋土は、茶褐色砂シルトであり、掘削している段階では上層の包含層と区別ができず、また、同様の茶褐色砂シルトの掘り込みもあったようで、埋土上～中層からの出土遺物は須恵器から近世陶器までであるが、溝に伴うものかどうかは現段階では不明である。溝の時期を考える遺物としては、埋土下層から出土している常滑大甕（写真6）、瀬戸<sup>⑧</sup>釉茶壺（写真7）等があり、これらは15～16世紀代のものと考えられる。

S D 04は、調査区南東側に位置する溝状遺構である。南北方向（やや北東～南西に傾く）に走り、S D 03と直交するような位置にあるが、南側では壁が検出され、ここで終わり、S D 03とは交わらない。北側は調査区外へ続くようである。幅約3 m、深さ約2 m 50cm、検出長約6 mを測り、断面はV字形を呈している。埋土は茶褐色砂シルトを主体とし、須恵器から近世陶器まで出土しているが、量は少ない。溝の時期については、埋土中～下層からは、須恵器・灰釉陶器・常滑甕の小片が出土し、近世陶器がないこと、S D 03と規模・形状とも似ていることから、S D 03と同時期と推測される。

S D 03・04の性格については、時期・規模・形状から城館を囲む堀と考えられ、両溝の間の部分（幅2～2.5 m）は、虎口にあたるのではないか。今回の調査区の西側、岡山病院内で行われた第1次調査の際、やはり城館に伴うと推測される溝が検出されている。調査区の北端中央から大きく湾曲して西壁に至る位置にあり、幅約4 m、深さ約1 mの逆<sup>⑨</sup>形状を呈し、埋土は底から20～40cmに暗青灰色砂シルトが堆積し、水が湛えられていたといわれる。16世紀代の遺物が出土しているという。S D 03・04との関連は不明である。また、同様の溝は本遺跡の南方約1.7kmにある伊勢山中学校遺跡第4次発掘調査でも検出されている。（幅4 m以上、深さ約2.9～3.5 m、断面はV字形を呈し、16世紀前半頃に埋没）

この地にどのような城館があったのか今のところ知られていないが、周囲には日置城跡、古渡城跡、小林城跡等があり、低地を臨む台地西端という立地からも城館があった可能性は高い。

P-4は、径45～55cm、深さ約30cmを測る方形のピットである。埋土は、2層に分かれ、上層は茶褐色砂シルトに黒褐色砂シルトブロック・地山ブロックを混じる土（厚さ20cm）、下層は黒褐色砂シルトと地山ブロックを混ぜた土で、底面に径20～25cmの扁平な河原石が



- ①茶褐色砂シルト
- ②     〃     (地山ブロックを多く含む)
- ③     〃     (黒褐色砂シルトブロックを密に含む)
- ④     〃     (砂質が強い)
- ⑤     〃     (砂質が強く、黒褐色砂シルトブロックを多く含む)
- ⑥地山ブロック、黒褐色及び茶褐色砂シルトブロックを混ぜた土
- ⑦茶褐色砂シルト
- ⑧     〃     (地山ブロックを多く含む)
- ⑨地山ブロックと茶褐色砂シルトを混ぜた土
- ⑩⑥と同じだが、やや砂質が強い

第7図 SD03断面図 (西面)

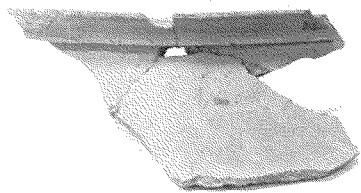


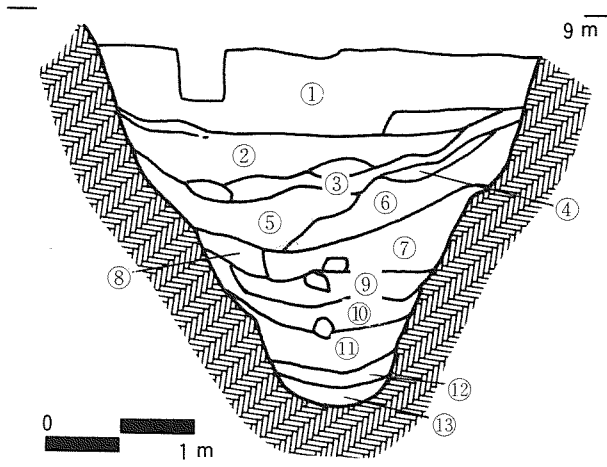
写真6 常滑大甕



写真7 鉄釉茶壺



写真8 SD03



- ① 淡茶褐色砂シルト (地山ブロック等を多く含む)
- ②       "                   (砂質が強く、地山ブロックを多く含む)
- ③ 茶褐色砂シルト
- ④ 淡茶褐色砂シルト (砂質が強い)
- ⑤ 茶褐色砂シルト (砂質が強い)
- ⑥ 灰褐色砂シルト (砂質が強い)
- ⑦ 淡茶褐色砂シルト (砂質が強い)
- ⑧ 暗茶褐色砂シルト
- ⑨ 淡茶褐色砂シルト
- ⑩ 茶褐色砂シルト
- ⑪       "                   (粘質が強い)
- ⑫ 暗茶褐色砂シルト (粘質が強い)
- ⑬ 茶褐色砂

第8図 SD04断面図 (南面)

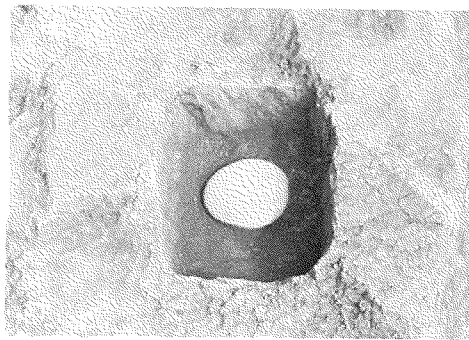


写真9 P-4

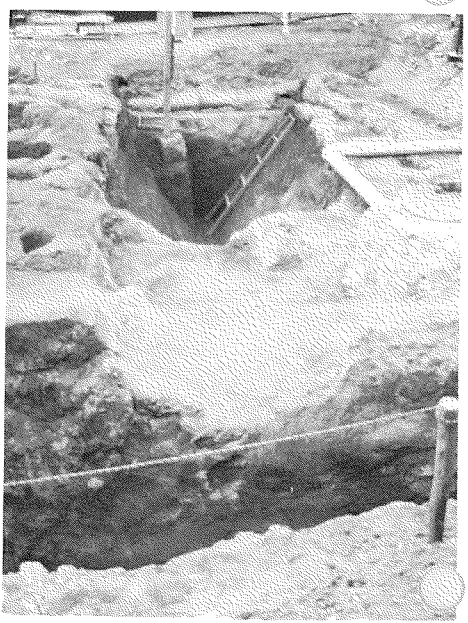


写真10 SD04(手前はSD03)

置かれていた。底面あるいは埋土中に河原石等を置くピットは、他に6基 (P-1~3・5~7) 確認されている。これらのピットの埋土は茶褐色砂シルトを主体としているが、規模・形状等は一定していない。ピットの配列は、P-1、2、5、7が東西に並び、P-4、6がそれぞれ南と北へ直角に向いた位置にあり、P-1と2の距離は約230cm、P-2と5、6と7はそれぞれ約115cmを測る。建物跡と考えられるが、それ以上のことはわからない。ピット内からの出土遺物は、土器・須恵器・山茶碗等の細片であり、時期を特定することが出来なかった。

○近世 (江戸期) ・その他

SK06は、幅2m~4m70cm、平面は楕円形を呈する大型の土坑である。底部は東半部にあり、底面は西から東へやや傾斜し、南側には土坑状の落ち込みがある。深さは2m~

2.5m、南側の落ち込みは深さ約15cmを測る。東側の壁は袋状に外側に張り出し（最も張り出すところで土坑上端より20cm程外側）、西側は、他の遺構が重なっていることも考えられるが、階段のように段がついた形状をしており、複雑な様相を呈している。埋土は、おおよそ上層が茶褐色砂シルト、中層が灰褐色砂シルト、下層が暗灰褐色砂シルトで、遺物は各層から大量に出土している。出土遺物は17～19世紀の陶磁器が主で、染付碗、染付皿、鉄釉茶入（第10図2）、呉須絵火入、志野織部大皿（同1）、上絵付小碗（同9）、鎧手掛分碗（同8）、褐釉双耳壺（同5）、呉須絵小瓶（同7）、鍔釉小瓶等、瀬戸・美濃・伊万里等の産である。S K 05の南側にあるS K 06は、北側をS K 05によって壊されているが、幅1.5m～2.3m、深さ約50cmを測る方形の土坑である。埋土は茶褐色砂シルトを主体とし、志野皿、染付碗、灰釉仏匱具等が出土している。S K 05の西側にあるS K 07は、2つのピットが並んでいるような形状をしている。S K 05によって壊されているため全容は不明だが、埋土は、上層は茶褐色砂シルト、下層は暗灰色砂シルトを含む暗茶褐色砂シルトで、白磁小碗、染付仏匱具、織部向付、御深井釉皿等やはり17～19世紀の陶磁器が出土している。

S K 12は一辺約1.7mの正方形を呈した土坑である。深さは約1m20cm、埋土は地山ブロックを多く含む暗茶褐色砂シルトであった。S K 13は南側を攪乱で削られているが、残存している一辺は4m10cmを測る大型の土坑である。埋土は暗灰褐色砂シルト、中から鉄釉小杯、織部大鉢、志野皿等17世紀代の陶器が出土している。その他、江戸期の遺物が出土している土坑としては、S K 08・09・10・11・12等がある。

井戸は6基検出されている。すべて1m～2m程しか掘削していない。S X 01は径約1m10cm、外側には掘り方があり、掘り方の径は約1m40cmを測る。1m程の深さで側壁がなくなり、その下は埋土が沈み横に広がった大きな空洞になっていた。この埋土から出土した第10図10の紫泥手付水注は19世紀代のもので中国製（宣興窯か）である。底に「萬豊順記」の銘がある。その他、大量の瓦と近世～現代陶器が出土している。S X 02は、包含層中で検出され、埋土から近世陶器が出土している。

表土直下、包含層上面で河原石の礎石が出土している。調査区全体に点在していたが、特に中央部に多かった。東西・南北方向に連続する部分もあり、明治時代以降



写真11 S K 12



写真12 SK06

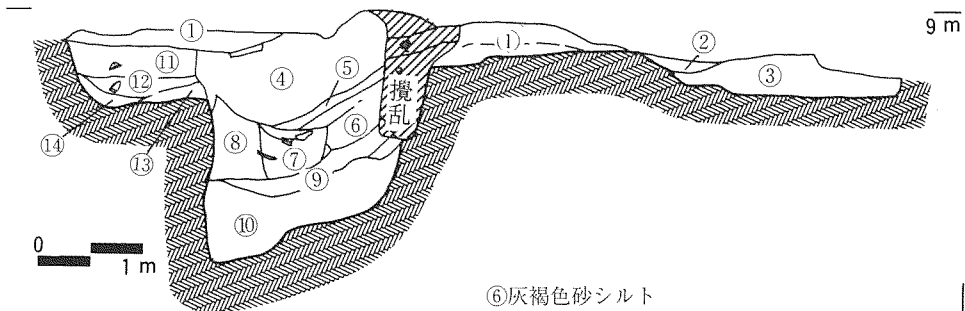


写真13 SK06 遺物出土状況(上層)



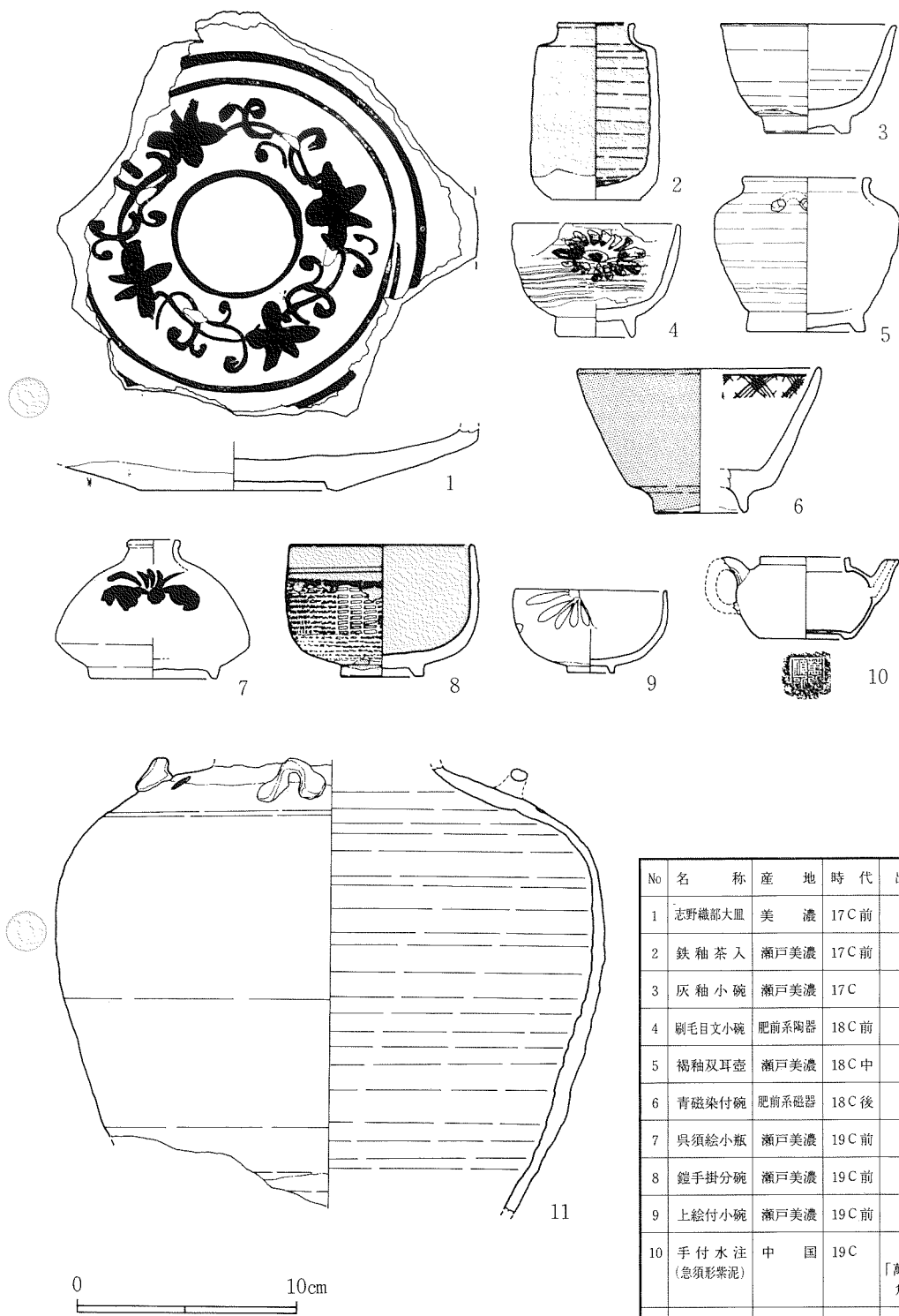
写真14 SK06 遺物出土状況(中層)

第9図 SK06・08等断面図(東面)



- ①茶褐色砂シルト
- ② 〃 (地山ブロックを多く含む)
- ③ 〃 (地山ブロック・炭化物を多く含む)
- ④茶褐色砂シルト
- ⑤ 〃 (黒褐色砂シルトブロックを多く含む)

- ⑥灰褐色砂シルト
  - ⑦ 〃 (地山ブロック・炭化物を多く含む)
  - ⑧茶褐色砂シルト(砂質が強い)
  - ⑨灰褐色砂シルト
  - ⑩暗灰褐色砂シルト
  - ⑪茶褐色砂シルト
  - ⑫ 〃 (やや灰色味がある)
  - ⑬淡灰褐色砂シルト(粘質が強い)
  - ⑭暗茶褐色砂シルト
- } SK 06 埋土  
} SK 08 埋土



No	名 称	産 地	時 代	出土遺構
1	志野織部大皿	美 濃	17C前	S K 06
2	鉄 釉 茶 入	瀬戸美濃	17C前	◇
3	灰 釉 小 碗	瀬戸美濃	17C	◇
4	刷毛目文小碗	肥前系陶器	18C前	◇
5	褐釉双耳壺	瀬戸美濃	18C中	◇
6	青磁染付碗	肥前系磁器	18C後	◇
7	呉須絵小瓶	瀬戸美濃	19C前	◇
8	鍍手掛分碗	瀬戸美濃	19C前	◇
9	上絵付小碗	瀬戸美濃	19C前	◇
10	手付水注 (急須形紫泥)	中 国	19C	S X 01 「萬豊順記」 角形印銘
11	褐釉四耳壺	中国南部	17C	S K 09

第10図 近世陶器



の建物跡と思われる。明治10年に旧千賀邸跡（岡山病院あたり）に「愛知医学校」が建てられたという記録（「名古屋大学医学部九十年史」より）があり、表土・攪乱からは医学校の名の付いた茶碗等も多く出土しているが、地図等で見る限り調査区より西に建てられている。一方、栄小学校の前身を見てみると、明治32年にこの地（当初は調査区より東側）に「名古屋市三蔵尋常小学校」が建てられ、その後、敷地を大きくして増築し、昭和6年、鉄筋コンクリートの校舎が建設され現在に至っている。（「栄小学校開講百年祭記念誌」より）礎石は明治・大正時代の学校に関するものではないだろうか。



写真15 礎石

その他の出土遺物としては、土錘（長さ 8.5cm、径 4 cm と長さ 5.5cm、径 2 cm の 2 点）、焼塩壺、水滴・人形類等がある。人形類は人の外、恵比寿や大黒天、亀、カエル、魚、鳥、ダルマ等バラエティーに富んでいる。

#### 4 まとめ

堅三蔵通遺跡ではこれまで9次にわたる調査が行われ、遺跡の性格も次第に明らかにされてきている。本調査では、縄文時代以降近代までの遺構・遺物が出土しているが、概要を大きくまとめると、1 古墳時代の土坑及び遺物の出土、2 平安時代の住居跡等の遺構及び遺物の出土、3 中世城館に伴うと考えられる溝の検出、4 江戸期の遺構と大量の遺物の出土、になる。

調査の特徴としては、中世城館の堀跡の検出があげられる。どのような城館があったのか明らかではないが、埋土中からの出土遺物から、恐らく16世紀前半頃には堀は埋められ始めたと思われる。織田信秀が尾張を治めていく時期（天文年間）には機能しなくなったのではないだろうか。第1・3次調査では古墳～奈良時代の住居跡が検出されており、今回の住居跡の検出と合わせ、遺跡の西側は古代の住居地区と言える。また、遺跡の東端付近で行われた第4次調査では古墳の周濠と考えられる溝が検出されており、古墳時代を考える上でも興味深い遺跡である。

第11図 遺構図



豎三蔵通遺跡 第2次調査の概要

編集・発行 名古屋市教育委員会  
名古屋市見晴台考古資料館  
名古屋市南区見晴町47番地

印刷 東海プリント社